

「樂になつた福智山」

(頂吉にまつわるお話)

小倉南区

まだ、この世の中を神さまが治めていたころのお話です。
福智山の頂上には、大きな岩がいくつものつていました。福智山は、とても高い山でしたから平尾台、英彦山・・・と四方の山が見あたせ、そのながめは、とてもよかつたのですが、頭の上有る大岩が重いこと重いこと。

ある日、福智山がまわりの山々を見まわしながら、「どの山も気持ちよさそうに昼寝をしている。それにひきかえ、わしはどうじや。この大岩のせいだ、頭が重くて、気持ちよく昼寝もできん。ああ、重いよう。だれか、この大岩をとつておくれよう。」と、言つていました。

そのころ、英彦山に赤鬼の兄弟おに きょうだいが住んでいました。
ちょうど兄鬼あにが神さまの使いで、福智の権現ごんげんさまのところへ来ていましたとき、この声こゑを聞きつけました。

「おや、福智山さんたにが、たいそう困こまつているぞ。ようし、わしがひとつ力を貸かしてやろう。」

兄鬼は、さっそく山頂さんちようの大岩をひよいとかつぐと、「エッサホイサたに」と下の谷までおろしました。

「赤鬼さん、ありがとう。ありがとう。」福智山は、大喜びです。「エッサホイサ、エッサホイサ。」

兄鬼は、夕方までに、いくつもの大岩をおろしました。
さすがの力持ちの兄鬼も、汗あせびつしょりになりましたが、おかげで福智山の大岩もあと少しだす。
ところが、兄鬼がかついだ大岩を下の谷に運んできたとき、

「おーい、兄さん。英彦山の神さまが呼んでいるぞ。急いで戻つて
こーい。」

と、弟鬼が呼びにきました。

「そりやあ、たいへんだ。」と、兄鬼はかついでいた岩を、その場に
ぱーんと投げ出すと、一目散なに英彦山にもどつて行きました。

「あわてもんだなあ。」と、弟鬼が下をみると、兄鬼が投げ出した
岩がぐらぐらしています。

「こりやたいへんだ。川に落ちて流れをふさいだりすると、村人た
ちがきっと困るぞ。」

弟鬼も、兄鬼に負けずおとらず力持ちです。岩がころがり落ち
ないよう、大岩の下にいくつかの石をしつかりはさみこみました。

むかしの人は、頭の上にものをのせて運んだりすることを『頂かぶむ』
といいました。

弟鬼がはさみこんだ石
が、ちょうど大岩を頭に
のせているような形かたちだった
ことから、その石を『頂かぶ石』
といい、このあたりの
ことも『頂石』と呼ぶよ
うになりました。

そして、いつのころか『頂かぶめ
吉』になり、今の地名にな
つたと言われています。

